

「澤守さん、どうぞ——」

人間に混じって俗世を生きるための名前を呼ばれて、サワモリは待合室のソファから立ち上がった。

「面会時間は二十分です。今度はちゃんと守って下さいね」

「はい」

薄紅色の「白衣」を着た看護師に促されて、サワモリは、厚い扉で隔てられた入口をくぐった。

薬品の臭いが微かに染み付いた、長い無機質な廊下をサワモリは進む——両側にならぶ扉の中から、目的の番号を見つけ出し、ノックする。

「どうぞ——」

ナースセンターからモニターしているのだろう。微かな電子音をたてて、ロックが解除される。

サワモリは、病室に入った。

入院病棟の個室は、狭く殺風景ではあったが、明るかった——昼の陽射しを集めたような、大きな窓を背に置かれた鉄のベッドの上、半身を起こした女が一人、微笑みかけてくる——。

「サワモリ……」

「今日は大分加減がいいようだな——カワヒメ」

笑って言いながら、サワモリは、右手に提げていた小さな菓子折を見せてやった。

「ほら。好物を買ってきてやってやったぞ。『芋長』の芋羊羹——」

「あら、嬉しい——」

カワヒメ、と呼ばれた女は、切れ長の瞳を輝かせて、嬉しそうに笑った。

「ちようだい。切ってあげる」

「……………」

僅かな瞬間、サワモリの顔を、不安の影が過ぎる——カワヒメは、笑う。

「大丈夫よ。……ここ暫くは、本当に具合がいいんだから。以前みたいなことはないわ」

「そうか。じゃあ、頼むぞ。……証拠を残さず新しい病院へ移るのは、結構大変なんだからな」

「はいはい、何度もご迷惑をおかけしました——」

「……………」

瘦せた指先が、鋭い黒文字を掴んで、柔らかい菓子を切り分けていく様をじっと見つめながら……サワモリは、過ぎ去った歳月を思い起こしていた。

この手の病院の窓に、頑丈な鉄格子が嵌っていた時代——心を乱したカワヒメが、オンバケの本性を露わにして、人々を驚かせたことを。

その度に——オンバケ達が力を合わせて、彼女の為に、新しい入院先を準備してやったことを……。

サワモリに許された、一ヶ月に一度の面会——それはもう、八百回を超えている。カワヒメが、その心に深い暗闇を——”あいつ”を宿してから、既に……。

「はい、サワモリ——」

「ああ。ありがとう」

……黒文字を差し出す指先が、不自然に震えているのを見ないようにしながら——サワモリは、芋羊羹を口に入れた。

「おいしい……」

「だろう？　ここへきて俄然、腕が上がった。芋長三代目、遅まきながら開眼せりつてとこか」

「先々代の味、そっくり……拓ちゃん、偉いわ。がんばったのね……」

芋羊羹を口に運びながら、サワモリはつい、吹き出した。

「拓ちゃんは止めてやれよ。今じゃ立派な頑固爺さんだ。何せあれから六十——」

「……六十五年よ、サワモリ」

過ぎ去った歳月を、数字にして呟いたきり、二人は口を嚙む。——二人のオンバケは、しばしの間、言葉を交わすのを止めて、窓の外に拡がる、現代の東京を見つめていた——。

「お前の中の”あいつ”は……どうしてる？」

サワモリの問い掛けに、カワヒメは、胸を押えながら答えた。

「ここに、いるわ……今も」

「……………」

はだけかけた入院着の胸元、形良い乳房の間に、四角い紙片が、しがみつくように貼りついているのを見て、サワモリは苦しげに眉を擡めた。——強い恨みの念が凝り固まって生まれた邪霊、「イパダダ」を封印するための「札」……六十五年の間、カワヒメの内部にイパダダを封じ続けている、強力な霊符……。

「カワヒメ、”あいつ”は……」

「……最近ようやく、大人しくなってきた。私が食べたたり眠ったり——笑ったりするのを、邪魔しないようになってくれた……」

「……………」

「私の中で暴れまわるイパダダに、六十五年の間、毎日話しかけて、慰めて……ようやく、やっとなの。私の言うことを、少しでも聞いてくれるようになったのは。私の言葉を聞くようになって……イパダダの言うことも、ちょっとだけ分かりかけてきたのに。それなのに……それなのに……」

「……………」

「ほんの数日前から、少し——少しだけ……」

震える手で胸の霊符を押えるカワヒメを、視線で気遣いながら、サワモリは呟くように言った。

「ここしばらくの『事件』は知ってるだろう。新しいイバダダが——それに加えて、歌姫まで東京に出てきているんだ。……お前の中にいる”あいつ”が、騒ぎ始めてるのかもしれないな」

カワヒメは、長い黒髪を波打たせて、瞳みはった瞳を上げた——。

「歌姫が東京に？ ……それじゃ、まさか……」

「ああ。あの娘の孫だ。……初めて見たときは、俺も驚いたよ」

「あの娘の……孫……あの娘の……」

幾度も繰り返して呟きながら、カワヒメは、サワモリに向けて、瘦せた掌を差し出した。

「私も——見せてちょうだい。会わせてちょうだい、サワモリ」

「ああ」

サワモリは、差し出された掌に、手を重ねた。カワヒメが、祈るように目を閉じる——。

「……サワモリ……」

「ああ……」

温かく重ねた掌を通じて、自分の中にある何か、優しく見つめられている……カワヒメの弱った心身に少しでも負担をかけぬよう、サワモリは、東京で会ったその娘の顔を思い出し、意識を集中する。

「……………」

重ねた掌が、微かに動いた。カワヒメは、目を閉じたまま小さく微笑み——やがて、はつきりと、呟いた。

「……カノンちゃん、ていうのね」

「ああ」

「本当に、そっくり……あの娘にそっくり……」

「ああ。そっくりだ。……何もかも、おかしなぐらいにあの時と同じなんだ」

「あの時と……」

カワヒメは目を開け、もう一度窓の外を見つめ直した。

眼下に広がる、東京の光景——その向こう側に、ひとときわ高く、銀色の尖塔タワーが聳え立っている。

完成の間近い、巨大な塔タワー。新しい時代の象徴となるべく造られている、新しい塔タワーが——過ぎ去った昔の出来事を、二人のオンバケに思い起こさせる……。

「あの日——俺達は、あそこにいた」

巨大な塔を見つめながら、カワヒメは小さく頷き、答えた。

「六十五年前の、歌姫——かなでちゃんの、孫が……」